

観光地づくりオーラルヒストリー <第5回>

観光地づくりのプロフェッショナル

—楽しむことが長続きする

元(社)日本観光協会 総合研究所長 古賀 学
(現 松蔭大学 観光メディア文化学部 教授)

1949(昭和24)年福岡生まれ、1972(昭和47)年東京農業大学農学部造園学科卒業。同年(社)日本観光協会(現公益社団法人日本観光振興協会)入協。観光地づくり、観光計画の策定、観光地の活性化に取り組む。業務部計画調査課長、情宣部情報システム課長、総務部総務課長、調査企画部長、総合研究所長等を経て、現在に至る。

1. 「観光」への接近

【なぜ観光の道を選んだのか】

●生まれ～観光との出会い

生まれは九州・福岡の大牟田で、父が勤めていた三井東圧の社宅に2歳まで住んでいました。その後、父が東京にある社団法人に転職したので、東京の調布に移ってそれからずっと東京です。小中高、桐朋でした。



写真1 古賀学氏への取材風景
(2014(平成26)年7月24日、松蔭大学厚木ステーションキャンパス)

母方の実家は下関の「八代館」という旅館で、今も営業しています。当時は大洋漁業の指定旅館で、祖父はふぐの調理ができました。東京に移ってからよく母方の実家には行っていましたが、私が食べ物で初めてうまいと思ったのが、この旅館で食べたふぐの吸い物です。幼稚園か小学校1年の頃ですね。ふぐは皿に並んでいるのを集めて食べないと食べた気がしないし、ウニも丸ごと一つ食べるのが当たり前という感じでした。食材を仕入れるため、祖父と一緒に唐戸市場に行ったのも覚えてます。今は観光客も気軽に入れるけど、当時の唐戸市場は業者しか入れませんでしたね。

観光との最初の出合いは1964(昭和39)年、中学3年の時に房総半島を自転車で1周したことです。私は当時柔道部にいて、最初は部の友達同士で行こうとしたんですが「中学生だけで旅行してはダメ」と言われ、高校生の先輩も3人くらい誘って合計6人くらいで行きました。予約は全然しない3泊4日の旅行でした。

鴨川で風呂に入った時、私が真っ赤に日焼けしてるので、隣にいたおじさんが話しかけてきて「今日泊まる場所がないんです」なんて話をしたら、「学校の宿直室にみんなよく泊まってるよ」と教えてくれて。行ったらそこは満員だったんだけど、「お寺で泊めてくれるかも」と言われて、近くのお寺に行ったら本堂の横に泊めてくれたんです。そういう旅ができたのは楽しかったなと思います。

高校1年の時には、九州一周の旅をしました。当時は地域ごとの国鉄周遊パスがあり、「九州一周21日間」というパスがあったので、それを買って友達3人と一緒に回りました。福岡から阿蘇、鹿児島などほぼ1周しました。印象が強かったのは長崎県の平戸です。神社と教会が重なり合っていたり、大きいソテツが生えている風景が印象的でした。10年前に再訪しましたが、ほとんど風景が変わっていませんでしたね。

キャンプをしようと思ってテントを持参したんですが、結局3回しか張らなかったですね。ほとんど旅館に泊まっていました。当時、1泊600円くらいでした。宮崎の旅館で、仲居さんにどうやって泊まったの？と言われ、こういう風に聞いて泊まったと言うと、「そういう時は込み込みでいくらかって聞かないとダメよ」と言われました。サービス料と税を入れた料金のことですね。それを聞いてから、いつも旅館では「込み込みでいくらか」と聞くようになりました。

平戸の旅館に泊まった時も、「本館と別館があって、本館の方がきれいだけど別館の方が安い」と言われたり。観光地側がいろいろ、旅の仕方を教えてくれたんですね。そういうのが面白かったです。

●東京農大入学から卒業まで

大学は東京農業大学に1967(昭和42)年に入学しました。もともと図面を書くのが好きで建築家になりたかったんですが、なぜ東京農大を選んだかという、小学校から中高とずっと同級の友人に中島君という友人がいて、彼は中島健という造園の大家の息子だったんです。高校の頃に中島さんのところで草取りのバイトをやったり、彼の家に遊びに行ってお造園の話をしているうちに、建築より造園の方が面白いかなと思うようになりました。中島君も東京農大に進み、学部も一緒でした。

農大では造園工学について専攻しました。水に興味があったので噴水について勉強していたんです。金井格教授(当時助教授)が担当の先生でした。設計まではできなかったんですが、日比谷公園や飛鳥山公園で噴水の写真を撮ってきたりしていました。

大学時代、観光の授業もありました。当時、高橋進先生が日本観光協会の業務部長だったんですが、非常勤で「観光および風景計画」という講義を教えていました。高橋先生は景観という言葉を使わず、風景という言葉にこだわっておられました。

大学に入ってから友達と四国一周して、3年の時にはアメリカに1ヶ月くらい行きました。初めての海外旅行です。ロスを中心に回り、メキシコにも足を伸ばしました。大学4年になって就職活動をするという時、金井先生からいろいろな就職先を紹介されたんですね。「観光が好きです」とたまたま一言言ったら、「じゃあ日本観光協会(日観協)に行ってみろ。図面は大きくなるけれど。」ということで紹介されたのが高橋先生でした。

高橋先生に会いに行ったら、「夏頃に一般公募の試験をやるので受けに来い」ということでした。私はそれからアメリカ旅行の時に知り合った友人と東北から北海道一周して、下関まで行って、瀬戸内海、和歌山を回って東京に帰るというトータル40日くらいの旅をしたんですが、戻った次の日が公募の締切日でした。試験は受かりましたが、一般公募で日観協を受けたのは私だけでしたね。

大学卒業の時、日本の中で行っていない都道府県は沖縄県だけでした。いろんなところに行きましたが、自分が旅好きだと感じたことは一度もないんですよ。ただ、何となく行くのが義務みたいな…。休みになるとどこかに行かなきゃいけないという強迫観念があって。なぜなのか、よくわからないんですが。

家族旅行は年に1回くらい行ってましたが、うちの親は本ばかり読んであんまり旅行に行かないタイプだったから、「自分から動かない」という思いがあったのかもしれない。あとは友達が後押ししたというのもありますね。高校生の時、九州一周に行く前は、何度も学校で集まってスケジュールを作ったりしていました。

表1 古賀学氏の略歴

【経歴】

1949(昭和24)年 福岡県生まれ

1972(昭和47)年 東京農業大学農学部造園学科卒業

1972(昭和47)年 社団法人日本観光協会入協

※業務部主査、業務部計画調査課長、情宣部企画宣伝課長、同情報システム課長兼務、旅フェア実行委員会事務局長兼務、関東支部事務局長、総務部総務課長、調査部長、調査企画部長、を経て2006年に社団法人日本観光協会総合研究所設立、所長に就任

1985(昭和60)年-現在 日本離島研究会幹事長

2006-2008(平成18-20)年 日本観光研究学会理事

2007(平成19)年 自動車旅行推進機構幹事・事務局長を経て現在顧問

2008(平成20)年 松蔭大学経営文化学部教授

2009(平成21)年 松蔭大学観光文化学部教授

2010(平成22)年-現在 日本観光研究学会監事

2010(平成22)年-現在 NPO法人観光文化研究所理事長(松蔭大学内)

2013(平成25)年-現在 松蔭大学観光メディア文化学部教授(観光概論、観光文化論、地域資源論、地域振興論)

2014(平成26)年-現在 NPO法人かやぶき集落荻ノ島理事

2014(平成26)年-現在 NPO法人交流・暮らしネット理事

【表彰等】

1989(平成元)年 利賀村(現富山県南砺市)より「感謝状」授与

1997(平成9)年 東京農業大学より「造園大賞」授与

2004(平成16)年 利賀村より「村政功労者」表彰

2005(平成17)年 高柳町(現新潟県柏崎市)より「感謝状」授与

【主な講師等】

1980-1983(昭和55-58)年 立教大学ホテル観光講座講師(観光計画論2)

1983-1985(昭和58-60)年 トラベルジャーナル旅行専門学校講師(観光事業論)

1986-1989(昭和61-平成元)年 国際観光文化学院講師(観光企業論)

2001-2007(平成13-19)年 東京家政学院大学家政学部非常勤講師(観光リゾート論)

2002(平成14)年-現在 東京農業大学環境科学部造園科学科非常勤講師(観光計画論)

2008-2010(平成20-22)年 東京大学まちづくり大学院非常勤講師

2010-2014(平成22-26)年 立教大学観光学部兼任講師(国際観光政策論、観光行政・政策論)

【主な委員等】

- ・南砺市観光大使
- ・国土交通省「水源地域対策アドバイザー」
- ・地域活性化センター「地域振興アドバイザー」
- ・国土交通省「観光統計の整備に関する検討委員会」委員
- ・国土交通省「まちめぐりナビプロジェクト(まちナビ)」選考委員

- ・観光庁「観光圏整備・観光地域づくりプラットフォーム支援事業検討会」委員等
 - ・観光庁「“地域いきいき観光まちづくり事例集”有識者委員会」委員
 - ・内閣府・国土交通省「観光カリスマ選定委員会」委員
 - ・国土交通省東北運輸局「観光圏相互の連携を基軸とした観光復興に関する調査検討委員会」委員
 - ・都市農山漁村交流活性化機構「農林漁業体験宿泊施設等整備調査委員会」委員
 - ・都市農山漁村交流活性化機構「都市住民とグリーン・ツーリズムの行動を活性化させる新たな手法」選考委員
 - ・松江市「松江市観光振興プログラム策定委員会」委員
 - ・全国離島振興協議会「離島振興法改正検討会議」委員
 - ・高柳町荻ノ島地域協議会「農林水産庁：食と地域の交流促進対策交付金事業（集落活性化対策）」指導
 - ・新潟県「新潟県満足度調査委員会」委員長
 - ・山梨県「観光振興計画策定」委員、「山梨県観光懇話会」委員
 - ・東京都日の出町「野鳥の森・こども自然公園設置構想検討委員会」委員長
 - ・小金井市「小金井市観光構想計画策定委員会」委員長
 - ・総務省「地域人材ネット」アドバイザー
 - ・小牧市「小牧市観光計画策定委員会」委員長
- * 上記及び講演、業務実績等の詳細は、「日観協二十五年史 本編・資料編」（日本観光協会編、1991（平成3）年）等を参照。

2. 「観光」における取り組み

【観光分野で何をやってきたのか】

●日観協への入協

1972(昭和47)年に大学を卒業して日観協に入りました。高橋進さんが業務部長、奈良繁雄さんが調査課長で、私はその下に配属されました。私の観光の計画や調査に関する先生をあげるとすれば、日観協に入ってからの高橋さん(当時東京農業大学非常勤講師兼務)、奈良繁雄さんのお二人であり、さらには調査・計画・研究をご一緒させていただいた先生方やコンサルタントの方々だと言えます。中でも奈良さんにはすごく鍛えられました。ただ、奈良さんは最後はすべて数字で表せるという考え方を話されたことがあり、そこが私とは考え方と少し違っていました。

私が入った時は猪爪範子さん(現地域総合研究所主任研究員)がいました。東京農大出身で私の先輩でした。ちなみに日本観光協会から立教大学に行かれた小谷達男先生も東京農大です。観光関係には東京農大出身者が結構いたんですね。環境庁(当時)も東京農大出身者が多いですね。当時は自然公園などが観光のベースになっていた部分が多かったので観光計画の本や定期機関誌などにも多くの環境庁の人に書いてもらっていました。

猪爪さんは私が入って2ヶ月後くらいに辞められました。ですから、入ってすぐ高橋さん、奈良さん、私の3人態勢になりました。その後調査を強化するというので、次の年、北海道大学から有山忠男さん(現株式会社ライヴ環境計画代表取締役)と東京農大から依田健一さんの入社を皮切りに私の後に結構新人をとりました。一時期は調査部門が7~8人態勢になりました。

昔から絵や図面を書くのが好きでした。キャンプ場やスキー場、子どものレクリエーション施設などのサイトプランとかを結構やっていたので、結果的に自分のやりたかったことがうまく生かせたと思います。

私は途中で旅フェア(現ツーリズム・EXPO・ジャパン)などのイベントをやったり、総務課長をやったり、情報もやったり、協会内部の仕事は一応全部やりました。でも、基本的には入ったときからずっと調査の仕事でした。自分では覚えていませんが「調査から異動したら辞める」と言ったというのを当時の常務理事から聞きました。結果、旅フェアの1回から4回目までを担当したことは、新たな観光事業の魅力を知ることになり、総務課長では調査と異なった人々と組織と関係を広く持つことができ良かったと思います。関東支部事務局長は1年たたずに変わってしまったのですが、その間、JRや都道府県の方々と一緒に事業を行うことができました。

観光調査や研究は、日観協に入ることが決まるまでは全然やったことがありませんでした。大学4年の時、入協が決まってから1971(昭和46)年の秋から冬にかけて新潟県の広神村・守門村の観光診断にバイトで参加しました。メインはスキー場開発についての調査で、それが初めての観光計画への参加です。その時のチーフが当時農大の助手だった中田総一郎さんです。当時3年生だった蓑茂寿太郎さん(元東京農業大学教授)も参加していました。

●観光診断を生んだのは日観協

私が入ったときに、それまで日観協がやってきた観光診断を全部調べ『観光』に載せました。タイトルは「日本観光協会 観光診断の28年」で昭和21～47年までをまとめています(図1)。当時は観光計画、観光診断の2種類の呼び方があり、概念の整理はちゃんとされていなくてごちゃごちゃでした。1964(昭和39)年頃は観光診断と呼ぶことが多かったですね(図2)。1952(昭和27)年に行った伊豆半島の調査は「伊豆半島観光開発計画」(社団法人日本観光連盟)という名前でしたが。

日観協が観光診断というようになったのは、1947(昭和22)年に依頼が来た時が最初です。当時、中小企業診断というのがはやっていたので、企業の経営診断を観光地にあてはめたような形で高橋先生が「観光診断」という言葉を作ったそうです。気象条件とか基礎的なことをきちんと調べるんですよ。だから「診断」なんですよ。私は本人からそう聞いています。最初に観光診断をはじめたのは日観協と言えます。

その後、最初に観光診断をして、後で観光計画を作るといったケースも出てくるんです。昭和40年代になると観光開発計画など、「計画」という言葉の方が多く使われるようになってきました。そのうちにだんだん「診断」という言葉が使われなくなってきました。



図1 日本観光協会が実施した観光診断の実績(昭和21年～47年)
(古賀氏が入協時に整理)

出所: 『観光』50号(昭和48年7月)、日本観光協会



図2 観光診断報告書(例)
島根県観光診断報告書
1964(昭和39)年10月
日本観光協会

私が日観協に入って初めてやった仕事が、山形県鶴岡市の観光診断です。私が入った頃、日観協の調査はほとんど大学の先生がやっていました。入った頃は人手もなく忙しかったので、多くは他の組織等へ協力をお願いをしていました。専門委員制度などもありました。そうしたことがきっかけで、大学の先生方、ラック計画研究所、ジェド日本環境ダイナミクス、ジュピオ、そして(財)日本交通公社の人たちなど多くの方々と知り合うことができました。

安島博幸さん(現立教大学観光学部教授)は私が入協した1年後の1973(昭和48)年にラック計画研究所に入ってこられ、一緒に房総の白子に行って民宿の調査をやりました。民宿の主人にアンケートをとるといいう仕事です。「テニス民宿」として隆盛で、当時の宿泊施設は結構民宿が主流だったんですね。

ちなみに、私は25歳の時(入協2年後の1974年)、仕事を休んで個人的に40日間くらいヨーロッパを放浪しました。回ったのはドイツ、スイス、イタリア、フランス、イギリス、ベルギー、オランダなどです。大学のアメリカ以来、これが2回目の海外旅行でした。

当時上司はダメだと言いましたが、常勤役員の支持もあり結果的におゆるしが出来て、当時、美化運動が注目されていたので、「ごみ箱を撮ってこい」と協会から10万円の支給がありました。それは全部写真代になりましたけど。その時の経験はすごく生きています。今でもまだ、当時のヨーロッパに比べて日本は遅れていると思うくらい、観光的に進んでいましたよね。

●日本船舶振興会(現日本財団)の補助事業

日観協では日本船舶振興会の補助事業が年間に5~6本あり、やりたいことを申請すれば通るといふ感じだったので、この補助金でやった事業はいろいろありました。今でも一番大きい成果だといえるのは、観光の各種原単位を表した「観光レクリエーション施設の基準」づくりではないでしょうか。また『観光の実態と志向』(図3)も調査研究の柱でした。この調査は1964年(昭和39年)から始まり、最初は隔年で実施していましたが、1989年(平成元年)を期に大都市の調査をやめて全国調査を毎年実施する方向で切り替えました。一時は各地の観光計画の前半部分となる「観光の現状」の半分くらいが、『観光の実態と志向』からの引用だったりしましたね。

『観光開発計画の手法』1970、『観光計画の手法』1976(図4)なども日本船舶振興会の補助事業です。今、私がもう一度復活させればいいと思っているのは『都道府県観光白書』(図5)です。1975(昭和50)年に第一回目の調査をやって、5年ごとに4回くらいやったと思います。日観協の調査部の7~8人で分担して全都道府県を回る形で、1人5~6カ所を担当しました。

私が担当したのは沖縄、兵庫、岡山などで、1県につき2泊3日滞在して、県庁の中をぐるぐる回って観光の部署と関係部署を訪ねて資料集めて話を聞くという形です。最初に担当した県をその後もずっと担当するので、観光政策がどう変化したかよくわかるんです。今は、都道府県で観光政策がかなり違うので、今でこそやるべき事業ではないかと思えますね。予算書なども引っ張り出し、行政の観光構造を知る上で大変勉強になりました。都道府県にとっても他との比較もでき、大いに役に立ったと思います。



図3 『観光の実態と志向 昭和40年1月』
社団法人日本観光協会

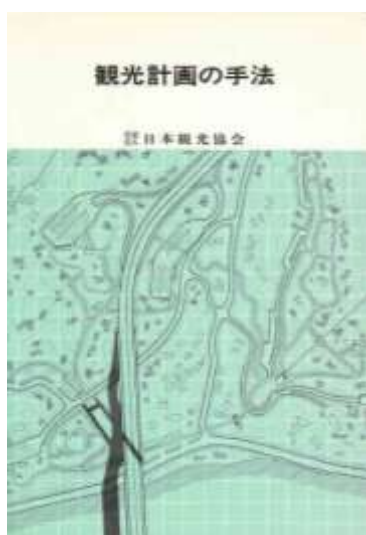


図4 『観光計画の手法』
社団法人日本観光協会



図5 『都道府県観光白書 昭和49・50年度』
社団法人日本観光協会

国内の観光統計の基準作りも船舶の補助金です。最初、観光統計は総理府が管轄だったんです。昔は総理府が観光政策審議会を所管していましたから、総理府とも結構事業をやっていました。結局、統計基準の統一はできませんでしたが…。県庁の人たちも統計の専門家ではないので、できるだけ易しい方法をいう要望をきくと、誤差が50%くらいになってしまったり。県によっては、「うちはもっと詳細にやってる」というところも出てくるわけで、統一するのは難しいですよ。都道府県統一の観光客の定義ができないのが課題です。

●原点となった新潟県村上市の仕事

私の観光の仕事での原点は、新潟県村上市の仕事といってもよいかもしれません。市の構想から計画づくり、そして観光施設の設計、周辺の公園整備に至るまでの継続した取組みになりました。

最初は1982(昭和57)年に「村上市観光レクリエーション構想計画調査」(村上市商工観光課)を行いました。次の年に「村上市鮭公園整備計画」(村上市農林水産課)を作り、それがサケの資料館「イヨボヤ会館」(写真2)の計画、実施設計になり、さらにイヨボヤ会館に隣接するサーモンパークの計画も同時に行いました。

水産庁の内水面漁業振興対策事業の一環で、遊漁者のための展示施設を作るという事業で、7,000万円の予算で資料館を作ってほしいという話が来ました。村上市の高孝三さんという観光課長が考え方の進んでいる人で、その人と親しくなって、毎月1回村上市に通うようになりました。高課長が7,000万円の補助金では足りないということで、作りたい施設を充実させ予算3億5千万円くらいの計画を提案しました。

その計画を水産庁に持っていったら、無理だと言われたんですが、たまたま次の年から自治省のまちづくり特別対策事業が始まるということで、高課長がこのことを敏感に察知して、その年に彼はまちづくり特別対策室長に就任したんですね。そちらの予算を使おうということになったんですが、水産庁は「それは困る」と。結果的に、水産庁が3億円を出したんです。ちなみに、次の年まちづくり特別対策事業が始まったときの応募記入要項の記入例にサーモンパークの内容が使われていました。

それで資料館の予算は3億円になり、その周辺の造園の園地を作ろうということでサーモンパークという公園の整備計画となり、結果的には総額12億円の事業になりました。今もサーモンパーク(資料館の名称はイヨボヤ会館)(写真3)は年間10~15万人の来場を維持しています。村上市には瀬波温泉という温泉地がありますが、この計画をやる前に観光客が来るのは夏の海水浴の時期だけでした。イヨボヤ会館ができてからは、冬の入り込みの方が増えたんですね。今も温泉の名物としてサケ料理が定着しています。

イヨボヤ会館の実施設計も私がやりました。最初、計画の仕事として受けたら、「建物の設計もやってくれないか」と言われたんです。建築をやっている友達がいるので、徹夜で教えてもらって図面を書きました。多分、変更されるだろうと思ったら、そのまま建ってしまいました。

この設計には大成功と大失敗がありました。大成功は、最上階の3階に調理場を作ったことです。そこで地元の高校生がサケ料理の実習をするようになり、単なる資料館ではないということで、ニュースでも報道されるなど注目されました。

でも数年経ったらこの調理場がなくなったんです。どうしてかということ、料理や材料を運ぶのが大変だからということでした。3階建てだから、エレベーターを作らなかつたんですよ(笑)。4階ならエレベーターを作っていたと思うんですが。後から調理場は建物の横に作られ鮭道場となり、最上階は展望室になりました。

地下に、鮭のふ化が観察できる場所があります。これが一番苦労しました。始めは三面側の下にトンネルを掘り、横や底をガラス張りにして鮭の遡上やふ化が観察できるようにしようとしたのですが、建設省から絶対駄目と言われました。3回目くらいの会議

のときにその代替案として、それなら人工河川を作りそこに鮭を泳がせ見せてはという案を委員会に出しました。が、鮭を生きたまま運ぶことが難しいとか、夏場はどうするとかといった提案に対してマイナーな議論しか出ませんでした。そして次の会議のときそれをやめて別の提案をしたのですが、委員からはあの案はどこいった？という意見。え！といった思いで案を復活。人工河川を作り、建物の地下をガラス張りして人口河川の側面から日本で初めて鮭がふ化するところを見られる施設が誕生しました。その後実際に三面川の鮭を捕る種子川の横をガラス張りにして鮭の遡上が見られる施設が整備されました。が天候により濁りなど観察条件が左右されるので、結果人工河川を整備して良かったと思います。

計画を行っているとき、北海道にサーモン科学館ができ、先を越されてしまいました。向こうが科学なら、こちらは文化ということで、現在のいよぼや会館は鮭文化伝承館ということで進めました。



写真2 イヨボヤ会館



写真3 鮭のふ化がみられる地下水槽

● 「そば」で長い付き合いとなる利賀村

利賀村では、1986(昭和61)年に「利賀そばの山里整備計画」、翌年に「利賀村そば資料展示体験施設計画」を作りました(写真4, 5)。村上市のことを利賀村が知って、そばの資料館の設計を私に依頼してきたんです。中谷信一さん(当時利賀村役場企画係長)が当時村長でした野原啓蔵さんと一緒に日観協に来て、「日本一のそばの資料館を作りたい」と。こちらは「資料館だけでは観光にならないので、そばの里にしましょう」ということで、食事や体験場所などを作ることを提案しました。

いろいろな人たちから「何で利賀でそばなの？」とよく言われましたね。なぜそばどころの信州じゃなくて利賀なのかと。信州も含めて、きちんとしたそばの資料館というのがその頃はどこにもありませんでした。利賀村もそばがさかんな場所ではなかったけど、野原さんが郵便局長をしていたとき、富山県で1人当たりの貯蓄額が最下位という汚名を返上しようとそば祭りをやったら成功したんですね。貯蓄額が富山県1位になったのです。それが尾を引き、村長となりそばでまちおこしをやろうという話になったそうです。



写真4 利賀そばの郷全景



写真5 そばの郷 そば資料館

1989(平成元)年には、利賀村の人たちと一緒に村の姉妹提携事業でネパールに行きました。当時、信州大学の氏原暉男先生というそばの大家がいろいろ協力してくれていました。「信州はいっぱいそばどころがあるのに、どうして利賀村と組んでやってるのですか」と聞いたら、初めて声をかけてくれたのが利賀村だったということでした。

氏原先生はネパールのツクツェという村で実験農場をやっていたんですが、その村と交流しようということになり、宮崎道正利賀村長や議長以下15人くらいで行くことになったんです。私も仕事を休んで個人的な旅行として参画しました。NHKも取材で同行し、30分番組で放映されました。

その後も私は10年に1度のペースでネパールには行っています。今まで3回行っていきますね。2013(平成25)年も個人で行きました。その前は2001(平成13)年にJETRO(独立行政

法人日本貿易振興機構)の仕事「富山県利賀村・ネパールツクツェ村観光・物産交流事業」で行きました(写真6)。

定期的に通っていると、ツクツェ村の変化もよく見えますね。最初に行った時は移動手段はロバと徒歩という世界で、車は全く走れませんでした。その時、地元の人たちは「自転車が欲しい」と言っていました、利賀村が油圧ショベルを1台寄贈したんですね。それで一気に道が舗装されて車が走るようになりました。

でもそのおかげでトレッキング客が減ったそうです。車が走ることでほこりが多くなったからです。発展の功罪を見たという感じですが、とは言え、今もトレッキングする欧米人が結構いますよ。道路のおかげでサイクリストも現れました。

ネパールで特定区域をトレッキングをする時はパスを買う必要があります。外貨獲得の目的もありますが、いくつかのチェックポイントが設けられており、トレッキング客が無事かどうか確認する意味もあるんですね。ペットボトルをなくすためのウォーターステーションと共に、なかなかうまくできているシステムだと思います。世界遺産などの街に入るときにもチケットを買う必要があります。



写真6 ツクツェ村での集合写真

利賀村では、1992(平成4)年に「世界そば博」というイベントが開催され、そばでまちおこしを目指すいろんな自治体が集まりました。そのつながりを保とうということで、中谷さんが1993(平成5)年に作ったのが全国麺類文化地域間交流推進協議会という組織です。2012(平成24)年中谷さんが理事長になり、2013(平成25)年から一般社団法人全麺協に変更されました。

この全麺協ではそばの段位審査をやっています。初段から五段まであって、今年から級を新設しました。昨年から級もつくりました。段位取得者は全国に1万1000人くらいいますね。私も結構引っぱりだされていて、最高段位にあたる五段の審査委員をやっています。

五段の審査は2, 3年に1度行われ40人程の人が参加し、受かるのは10数人です。元々、そばで地域振興をするのが目的の組織なので、そば打ちの技術だけでなく、地域振興をやる資質があるかどうかを審査します。論文発表の時間もあり、5分間ずつ発表してもらい、それをチェックします。1回目と2回目は利賀村でやっていたのですが、2013(平成25)年の第3回は北海道の幌加内で開催しました。私は会の20周年の基調講演を行い、現在「そば段位倫理委員会」というのにも委員として参加しています。そばの関係では、利賀村がそばの現在交流をしている韓国平昌郡へも同行しました。

日観協として利賀村から仕事として受けたのは、このそばの里の一連の計画と、飛翔の里の構想計画、JETROの仕事だけです。(「利賀そばの里山整備計画」1986年、「利賀村そば資料展示体験施設計画」1987年)。あとは利賀村でダムができる時に、景観委員会に入るなど委員的な形で関わっており、どちらかという個人的なこととなっています。そばの郷の実現化、世界そば博覧会、「瞑想の郷」等一連の整備計画、観光振興策についての指導・助言が中心でした。村の人からは「こういう計画があるけどどう思うか」みたいな話は来るけど、相談には委託費があるわけではないので日観協として動けないので、基本的に個人として動くしかないという感じです。

例えばスキー場とゴルフ場の計画が持ち上がっていて、「どう思うか」と村長から相談を受けたりしました。スキー場は以前から若い人たちがやりたいというのを聞いていたので「いいのでは」と言いましたが、ゴルフ場は利賀村みたいなところが山を削って作っても人は来ないし、計画を見ても無理があるので、「やめた方がいい」と言いましたら、スキー場は作ったけど、ゴルフ場は結局作りませんでしたね。

今の南砺市長田中幹夫氏が利賀村出身で、中谷さんの元で働いたことのある人で、私は彼によく送り迎えしてもらっていました。そういう関係もあって南砺市の観光大使をやっています。このように利賀村と長くつき合っている理由は、とにかく利賀村の人たちと個人とのつながりからといってよいとおもいます。当時人口が1,000人くらいの村だから、行政も住民も一緒なんですよ。行政マンも住民としての意識が強い。市のレベルだと完全な行政マンとして付き合うけど、村だと行政マンも一人の住民として話をしますから、「家に泊まっていけ」とか自然と友達づきあいになってしまいますね。

●時間とともに体制を整える新潟県高柳町との付き合い

利賀村のほかにも長くつきあっているところは、新潟県の高柳町(現柏崎市)ですね。ここは利賀村での私の仕事を知って、頼んで来ました。高柳町では1988(昭和63)年にふるさと開発協議会という組織を立ち上げ、私は5つの分科会の中の第4分科会「都市と農村の交流」という会にアドバイザーとして入りました。これは、地元の人たちが自主的に運営することを基本とした委員会で、行政はオブザーバーとして書記の役割をするくらいでした。

その第4分科会を中心に「ゆめおいびと」という組織が作られ、「狐の夜祭り」というお祭りが生まれました(写真7)。踊りも曲もメンバーの自作自演です。1989(平成元年)9月15日に第1回が開催され平成と共に回を重ねています。第1回目を開催したときは、地元の人たちが40万円くらい自分たちの持ち出しでやりました。2回目に、この祭りを撮った方の写真が新潟県の観光写真コンクールで最優秀賞か何かの賞に選ばれたんで

す。次の年からカメラマンが大挙してくるようになり、現在でもカメラマンの多いイベントとなっています。



写真7 高柳きつねの夜祭り

「ゆめおいびと」は、狐の夜祭りを始めたのを切っ掛けに、じよんのび村を始め観光振興の実施部隊として動きました。設立3年目、町が彼らに補助金を1000万円出し、雪祭りも始まりました。今も高柳町ではこの「ゆめおいびと」という組織が中核的に動いています。

2011(平成23)年にはメンバーの米山秀基さんが地域のそば生産者と組んでそば屋をオープンさせました。私はそのそば屋づくりを手伝ったり、高柳とはここ数年一緒に仕事をしています。アドバイザーとして年に6回来てくださいといった形です。簡単な報告書などは作りましたが、NPO法人じよんのび研究所(柏崎市高柳町)の「百姓のそばネットワーク推進事業」(2010-2012(平成22-24)年。新潟県地域復興事業)や荻ノ島地域協議会の「食と地域の交流促進対策交付金事業(集落活性化対策)」(2012-2013(平成24-25)年、農林水産庁事業)などを手伝いました。

2013(平成25)年に、高柳町の荻ノ島集落に「NPO法人かやぶき集落荻ノ島」が立ち上がりました。私はそのNPOの理事にもなっています(写真8、9)。今は保存活用で進んでいます。ふるさと開発協議会が始まった当時は、住民からは、かやぶき民家の保存・活用に対して、私たちが貧しかったから残ったのであって、お金があつたらとっくに建て直していた。そんな貧しい建物を人に見せることはできない、という声などもありました。私は欧州で「ウサギ小屋」と称された東京のコンクリートの住宅とどちらがよいでしょうかと話したことから、住民の方々とは白熱した議論が交わされていたことが記憶に残っています。



写真8 高柳町萩ノ島環状かやぶき集落の風景



写真9 高柳町萩ノ島環状かやぶき集落の風景(冬)

じよんのび村の再整備計画は、アドバイザーとしてかかわってきました。国土交通省の家族旅行村をはじめ様々な補助金を使って作る施設です。そうした施設の一番の欠点なんですが、温泉、宿泊、食事などそれぞれの施設によって補助金の出所が違うので、

食事施設に厨房と客室があり、温泉施設にも厨房と客室と土産売り場があり、加工施設にも厨房と土産売り場がありといった形で、設備が幾重にもたぶってしまうんですね。これではとても管理できないということで、整理して統合しようということになったんです(写真10、11)。その再整備計画として「高柳じよんのび村経営改善方策検討事業」(2005(平成17)年)を日観協として受託しました。



写真10 じよんのび村



写真11 じよんのび村萬歳楽

今、高柳は食の観光に力を入れています。塩沢街道といわれている沿道には、そば屋、ラーメン屋、パン屋などが集積しています。「百姓のそばネットワーク推進事業」(2009(平成21)年)では食の街道マップも作成されました。ラーメン屋は、いつも行列ができており、その店の前には、じよんのび村をやめた夫婦がはじめた手づくりパンの店

があって、午前中で売り切れるほど人気です。魅力的な食の施設がうまい具合に集まったんですね。あと「月湯女(つきよめ)荘」という施設があり、しゃれた内装にして山菜のバイキングなどをやったりして、ここもなかなかいい方向で動いていたのですが、残念ながら行政施設であり、行政が廃止を決定してしまいました。

荻ノ島では、NPO法人かやぶき集落荻ノ島を中心として、再整備計画が始まっています。2014(平成26)年4月から寄付金も集め始めています。絵手紙教室をやっている東京の先生など様々な方々が支援活動に参画しています。荻ノ島は絵手紙教室の場にもなっています。そういう意味では、継続的な地域のファン作りというのは大事ですね。

●千葉県での県計画策定から広域計画、市町村計画への展開

意外と面白かったのは千葉県の仕事です。当時県には80市町村あったのですが、私は全市町村を3回、回ってるんです。千葉県庁でもそんな人はいないといわれたくらいでした。

まず、1983(昭和58)年に計画を作る前段階の基礎資料調査(「千葉県観光基本計画策定基礎資料調査」千葉県商政観光課)をやったんですね。その翌年に観光基本計画(図6)を策定するための調査(「千葉県観光基本計画策定調査」千葉県観光物産課)をし、さらにその翌年の1985(昭和60)年から3年かけて5つのブロック別計画を作りました。初年度の1985(昭和60)年は南房総地域と九十九里東総地域、翌年に北総地域、次の年が千葉東葛地域と上総地域です。1回目に全县を周り、ブロック別の時にまた回っているわけです(写真12)。続いて「千葉県国際観光ルート策定調査」((財)千葉県観光公社)をやったので、その時にまた回りました。さらに1990(平成2)年に国際観光モデル整備計画の方針も策定しました。特に、千葉県観光資本計画においては、80市町村を延べ40日かけて県の方々と回ったり、報告書の仕上げは、市内の旅館に県の方々と泊まり、1泊2日みっちり最終調整作業を行ったことが印象に残ります。私1人に県の方が10名ほどいました。

翌年の1991(平成3)年に千葉県観光経済効果実態調査を、翌々年に千葉県の観光協会で、ホテル旅館の実態調査を2年にわたって実施しました。2004(平成16)年には千葉県アドバイザー派遣事業で3年くらい関わりました。千葉県内で手を挙げたところに、ふさわしい調査員を派遣する。基本計画、実施計画、実施というところまでをやりました。我々がアドバイザーとして行く、または派遣するのは最初の2つの部分まで。実施の部分には県が補助金を出すという補助金制度でした。

当時、千葉県は新しいことをやろうと一生懸命考えている若くて面白い人がいました。観光に力を入れていたので、市に対していい補助金を作りました。計画づくりを行い、それを実現するための事業を3年間支援するというものです。継続性がある補助制度だったので、いろんなことができました。佐原の山車会館などもその補助金で作られました。計画づくりから施設整備までを含めたいい補助金でしたね。そんな形で千葉県とはつながっていました。

県がやると、今度は市も動くということで、県の基本計画ができたのが1984(昭和59)年でしたが、1985(昭和60)年に千葉市の観光基本計画をやりました。その後千葉市が毎年、観光バスのルート整備計画(1985年)、観光船の運行計画や、ちばインターナショナル

ルレクリエーションビレッジ計画(1987年)など、1991(平成3)年頃まで千葉市の調査も続けてやっていました。他に木更津とか、千葉県内をやるようになり、千葉県内はかなり集中的に行いました。市の方は、多くは石川洋美先生(芝浦工業大学名誉理事長)、阿比留勝利さん(株式会社ジェド・日本環境ダイナミクス代表取締役、現城西国際大学観光学部客員教授)と一緒に行了きました。



写真12 千葉県ブロック別計画(南房総地域)策定時の集合写真

*石川洋美先生(委員長、芝浦工業大学(当時)、最前列中央)、山村順次先生(千葉大学(当時)、中列右から三番目)、牧谷孝則さん(観光デザイナー、株式会社コミュニティ&コミュニケーション、中列左端)、豊川洋さん(日本観光協会、その後川村学園女子大学教授、昨年退職、中列左から三番目)、奈良繁男さん(日本観光協会、最後列左から三番目)、古賀学氏(日本観光協会、最後列右端)



図6 『千葉県観光基本計画』
(千葉県)の表紙

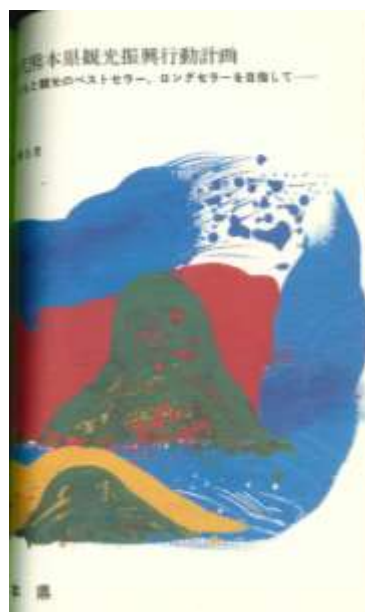


図7 『熊本県観光振興行動計画』
(熊本県)の表紙

千葉県と同時期に、「熊本県観光振興行動計画」の策定もしました(1989(平成元)年)(図7)。ここも各ブロック、地域別にヒアリングをし圏域別の計画を作りました。その内容をふまえて書くわけですが、そのうち一番いいところに次の年に補助金を出す。要するに、やる気のあるところに出すという姿勢でした。今では当たり前のことかもしれませんが、当時は平等にということがほとんどだったが、その担当者の草野さんの英断でやってたようです。ちょうど細川知事の時です。草野さんはユニークな人でした。新しい試みをしたり、意気込みがありました。計画書は、見開きだけでいい、文字はあまり書かなくていい、できるだけわかりやすく。そして、表紙は利賀村のネパール同行のときに知り合った古川通泰さんに仕事として描いてもらいました。人によって、県の計画といえどもずいぶんユニークなことを、やればできる例だと思います。その方と2人で現地調査と称して県内を回り、天草にあるデザインが和洋折衷の民宿に泊まったり、人気の出始めた黒川温泉を視察したり、楽しい旅をすることができました。

●宝塚市のロゴ制作

平成のはじめに企業や行政でCI計画が流行った頃、宝塚市からロゴを作ってほしいという依頼を受けました。そういう仕事の依頼を受けたのは最初で最後です。宝塚市職員の名刺に刷られている五線譜のロゴはそのとき作ったもので、今も使われています。委託料は500万円でしたが、実費で530万円かかってしまって、赤字でした(笑)。阪神競馬場で行われるお祭りで、3つの案を市民に見せてどれがいいか意見を聞いたり、いろんなことをしましたね。

当時、日観協は相談窓口みたいな感じで、言えばなんとかしてくれるという存在だったんですね。「すみません、これしか予算がないんです」みたいな話がけだいたい日観協に来るんです。一応、県レベルでいくら、市レベルでいくらという目安は決まっていま

したけど、結局値段とは関係ないんですね。日観協としては県が会員なら、その下に
いる市町村もやはり会員という意識をとらざるをえないところがあるので、頼まれればや
るという感じでした。

●松江市における都市観光の推進

継続的に、そして様々な事業で集中して行った地域として松江市があります。始まり
は、1998(平成10)年度自主交付金事業として「観光地づくり推進モデル事業」で松江市
をモデルの1つとして取り上げたことでした。それを切っ掛けに、松江市より依頼があ
り、平成11年度から平成24年度まで日観協を通して人材を派遣しました。当時私が総務
課長を行っていたのと旅フェアとの関係で旅行会社の方とつながりがあったため、東急
観光から松江市へ日本観光協会を通した形で派遣をおねがいしました。さらに、1999(平
成11)年度JNTOと共催で「国際観光シンポジウム」を開催しました。

その後、松江市テーマ型観光推進事業(2000(平成12)年)、松江市朝の散歩道アンケ
ート調査(2001(平成13)年)、松江市都市型温泉再生事業(2004(平成16)年)。そして
2006(平成18)年に松江市観光振興プログラム策定調査事業を行いました。松江市都市型
温泉地再生事業は、都市計画部市街地整備課からの委託でした。それは長く観光のセク
ションにいた方が市街地整備課に異動になり、人的に継続していたことによります。松
江しんじ湖温泉が、中心市街地の中にあることにもよりました。そして、2007(平成19)
年に「松江しじみ館調査事業」の依頼が年度末にありました。松江市が、その年の後期
NHK連続ドラマだんだんの舞台となり、宍道湖のしじみが題材となるからでした。観
光物産館を改造し、しじみを中心とした会館にするというものでした。当初ほどの規模
にはなりませんでしたが、現在、しじみ会館としてリニューアルされています。これが
日本観光協会において、私が担当した最後の計画となりました。

3. 「観光」に関する失敗と反省

●市町村合併が与えた観光地づくりへの影響

利賀村は、当初からお付き合いがあり、観光地づくりは上手く進んだ事例だと思っています。ただ、当時利賀村のやる気から様々な省庁が補助金をもってくるといった状況もありました。それに任せて様々な計画、施設整備を行ってきた。立ち止まり考えるゆとりがなかった。それが良かったという面もありますが、今ひとつゆっくりと共に考える余裕を持った方が良かったと思っています。

また合併があり、例えば全麵協という組織も市町村合併でちょっとおかしくなっちゃったんですよ。当初はそばでまちおこしをしていた村や町が会員だったんですが、合併で全部吸収されてしまいました。合併すると、そういう経費をまず削るじゃないですか。だから今は行政会員がゼロになってしまって、個人会員ばかりとなってしまいました。

元の村や町は、合併後もそばでまちおこしを一生懸命やろうとしているんだけど、自治体という枠が消滅しちゃうと、今まで通りの活動ができなくなってしまうんですね。ここが市町村合併の一番の問題だと思いますね。今までやってきた活動の価値を、合併先の自治体が汲めるかどうか結構大きいです。宝を得たと考えるのか、お荷物を背負ったと考えるのか。そういう意味では市町村合併によって観光が一番打撃を受けたかもしれませぬ。情報が均等になり、その分中身が薄くなってしまったから。

●予算オーバー

宝塚市におけるCI (Corporate Identity) 計画で実費が委託費を上回ってしまったことです。その原因は、行政の言うなりになったことと、そうしなければできなかったことです。マーク一つと思いますが、市のシンボルとなるものを作ることの大変さを実感しました。今はゆるキャラなど簡単にアイデア募集で数万数十万の懸賞金で作ることも多いですが、実際に市民に共感をえるものをつくるのは大変なことでした。また、当方の方がおもしろさにのめり込んでしまったこともあります。担当の課長と係長が昼も夜も一生懸命だったことも引き込まれる原因でした(笑)。月1回、夜行列車で朝8時からの会議(当時パワーブレックファーストが流行っていた)などもこなしました。当初観光のCIだったはずが、いつしか市のCIとなってしまうことでした。できあがると待ってましたとばかり、市の企画がだした報告書の表紙を飾りました。委託内容の枠を維持することは、時として大変難しいこともあります。

●施設は作ったが、運営は？

今まで関係した施設整備はあまり多くありません。村上市のサーモンパーク、利賀村のそばの郷及びそば資料館、高柳のじよんのび村、神津島村のどんたくハウスなどいくつかありますが、その運営への関わりがすべて中途半端でした。依頼された範囲以外のことについて口出しはしにくいのですが、生みの施設は、もっと運営まで出しゃばって関わり合っておけば良かったと、後悔しています。

●商売にならなかった？

観光計画策定の仕事が商売になっているかというと、あまり大もうけする商売にはなっていないかもしれません。協会の会員のためということから、採算度外視の仕事ばかりをやっていたのでは。但し、その中で築いた人間関係だけは続いています。利賀の中谷さんや村の皆さん、高柳の春日さんやゆめおいびとの方々、神津島の河合さん、宝塚の村上さん、会津三島の鈴木さんなどなど、そんな繋がりができる仕事に携われたことを大変うれしく思っています。このようなことに満足をしている私は、本当に仕事というのをしてきたのでしょうか？はなはだ疑問です。

●失敗のないのが失敗？

よくよく考えると、それほど失敗らしい失敗をしていないかもしれません。それは99%行政の仕事をしていたことからかもしれません。基本的に最終的にはまとめ上げる、というのが行政のお仕事であり、そうした中で計画や調査を実施していきました。行政の中には破天荒？な方もいましたが、そうした人とは気が合いすぎてさらによりよい計画ができたのではないかと思っています。

行政の仕事をしていると、失敗を犯す余裕すら無かったのかもしれません。

4. 「観光」の計画とその実現

●行政の計画論と個人の企画書をつなぐ

行政の計画論って何だろう？個人の計画論、観光カリスマみたいな地域を動かしている人たちは特定の計画論という考え方を持っているのでしょうか。理念は強く持っています。きっと、個人の場合は計画でなくて企画書を作っているんじゃないかと考えたりします。もう先が見えている。要するに即実践、即企画書プラスお金、あとはそのための企画書を作る。計画に不可欠な調査などはないんじゃないでしょうか。

一方、行政は行政計画を作って実行している。特に最近は条例ができてそれに則った計画という形で、実現性はあるけれども夢がない。目標にこだわりすぎてそれからはずれることはない。

行政がやっていることと民間がやっていること、どっちもいいところがあるし欠点もあると思いますが、それをどう結びつけていけばよいのかというところがまだ見えていない。

日頃、それぞれ地域で実践をしている方々個人が頭に描いている計画論って、どうなっているのかを考えてるんですけど、例えば利賀村の中谷さん。行政から関連組織そして個人となった今でも、地域づくりについて実践しながらいろいろと考えています。そうした中で、私たち外部の人間の役割は何なのか、あるいはこれからどう対応していったらよいのか、未だいろいろと考えさせられてしまいます。結果、彼らのビジョンを形にしてあげるといふことにつきてしまうのですが、では具体的にはどうやっていけばよいのか。一緒に歩むという実践ありきなのでしょうか。

中谷さんも、高柳の春日さんも、行政にいました。そのときお手伝いをしてきたことを考えると、行政の一職員のビジョンを、私が計画書に作りあげる、それをやってきたような気がします。行政マンと行政組織、計画策定と行政マンとしての実行。そういうところを明らかにしていくと、もうちょっと実践的な計画論が、地元主体の計画論が出てくるんじゃないかと思っています。

●地域の専門家である地元の方と観光のプランナーの関係

ある意味、地元の方のほうが地域については専門家。我々がやるのは、観光の視点から地元の方がわからないことや他の事例などを、わずかな知識とともに提供しながら、彼の考えをまとめる手伝い。そんな役割だと思っています。いくら長く地域振興につきあっても、私自身が主役になることはないでしょう。また逆に、その地域に頼られているという意識もあまりありません。彼は彼で好きなことをやっている。そして何かのときに「それはいいね」と言ってあげた同意の言葉が、彼らの実行のための自信につながっていれればいい限りです。

5. これからの「観光」・「観光地づくり」・「観光計画」への提言

【これからのわが国の観光、観光地づくりに必要なことは何か】

●地域とつきあうスタンス

私は、常に何か頼まれたら受けるというスタンスであり、こっちから口を出すことはほとんどしないんです。

地域に通うのも、相手から頼まれることが始まりであり、また、向こうから言ってきたら原則断わりません。

以前、中谷さんから富山空港から利賀村までヘリのデモフライトを行うので「乗らないか」と誘われて行きました。次の日飛行機で東京に帰る予定でしたが、その日の宴会の時、県の担当者からそのヘリが調布飛行場まで帰るけどのりませんか、という話が。当然、うちが近くなので乗せてもらいまして(笑)。いろんなつながりがあると、さらにその繋がりからいろんな体験ができるんだなと改めて思いました。快晴の空を、立山、諏訪湖、甲州街道上空を一直線。二度とないであろう(現に今までない)すばらしい体験でした。

日観協の調査関係では、私のような“外が大事”みたいなスタンスの人は少なかったと思います。調査関係は全体の組織の中ではどうしても特別になることが多いとおもいます。出張が多いということも、他の部署とは仕事のやり方が大きく異なっていると思います。また、理科系が多かったのも特徴だとおもいます。辞めた人もいます。やりたいことをやろうとすると、組織の中で限界が来ちゃうから。私も最後の頃はだんだんと動きにくい状況になってきました。さらに残念なのは今の人たちは、外で活躍したいなどというやり方がしにくくなっていると思いますね。観光地域づくりという中で、そういう場や機会も少なくなってきたようです。

私が動くのは、やはり人ありきですね。個人的に合わないとは続かない。商売と割り切れば誰でもいいんですが、私はあまり商売感覚がないから。いわばボランティア活動ですよ。しかしボランティアもプロがやると面白いと思うんです。今後は、そういう専門家集団のボランティアもあっていいと思いますよ。

●観光計画は誰のため？

昭和50年代に観光行政が一時なくなっただけですよね。兵庫県、埼玉県、千葉市などから観光という言葉が消えました。観光課などもなくなりましたし。その代わりに出て来た言葉が「余暇」です。余暇における住民のレクリエーションの場ということで観光施設や資源を考える。すべて行政にやることは、その行政区の住民のためという考え方で

結果的に、再び観光という言葉が復活しさらに位置づけが高まっていきましたが、行政は基本的に住民の福祉のために仕事をするのが主目的で、最終目的は住民のためなんですよね。地方自治法にも最初に書いてあります。「行政は住民の福祉を目的とする」と。

そう考えると、行政における観光というのは、あくまでも手段としての位置づけでなく
てはいけません。最終的には観光振興施策は、住民の福祉、住民の住み良い場所作りに
観光も寄与する方向に持っていかないといけない、というのが私の結論です。

やっぱり一番は住民ですよ。住民は観光地も観光資源も関係ないから。観光客は住
民じゃないわけですよ。だから観光計画は誰のためにあるのかと聞かれたら、「観光客
のため」と言えばわかりやすいんですけども、私の答えは「住民のため」です。観光
事業者も受入側と言うことから考えると、自身は住民であるという認識で商売をしなく
てはいけません。そうすることにより「住民のため」ということが地域一体の
効果として位置づけられます(図8)。

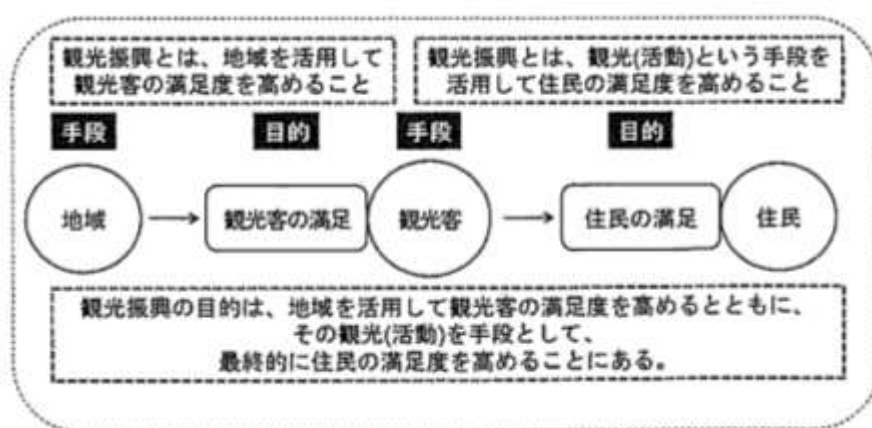


図8 観光振興の目的と手段

出典：古賀学（2013）：「ホスピタリティの視点からこれからの観光を考える」

『観光とまちづくり』2013-2014SUMMER 512号, (公社)日本観光振興協会, p. 21

●良い観光地を作るために

そのように、観光事業者もまず住民であるべきだと思います。自分たちの宿が儲かれば
いいというのではなく、自分たちがまず観光資源を守る義務があることをもって観光
事業者が意識しないといけない。それをするからこそ、初めてそれでお金を稼ぐとい
う権利が生まれるのです。

観光客は観光資源を見に来るわけです。その観光資源は住民やボランティアが守って
いて、それに乗かってただ儲けているだけでは、その人は観光事業者ではなく単なる
「事業者」です。観光資源を守ってくれている人たちに、自身もその活動に参加するの
は当然として、何かの形で感謝の意を示すとか、何かしら還元する必要もあると思いま
す。

観光事業者が観光資源に目を向け始めたのはごく最近だと思います。最近ではそうい
うことを考えざるを得ないところまで追い込まれて、観光資源に目を向ける観光事業者
も増えてきたとは思いますが、そうは言ってもまだまだ単なる「事業者」は多いです。

●プランナーに必要なこと

私は2009(平成21)年、日観協を早期退職して、それから松蔭大学で教えています。学生が地域に行くと、喜んで、ほぼ遊び半分でまちづくりや地域おこしをやるわけですね。観光計画を作る人にとってもそういう感覚は大事だと思います。結局、自分がやっていることを楽しめるかどうかですよ。義務としてやるのか、もっとつっこんでいけるのか。そういう意味で、当然地域の問題解決といったスタンスは必須ですが、楽しんでやるという感覚はプランナーに一番必要かもしれないですね。

2014年7月24日

会場：松蔭大学厚木ステーションキャンパス

取材者：公益財団法人日本交通社 観光政策研究部

梅川智也、堀木美告、後藤健太郎

2015年3月7日文章校正・追加終了

本レポートの引用・転載に関しましては、以下 URL をご確認ください。

<http://www.jtb.or.jp/etc>